

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 川村 大

動詞にいわゆる助動詞ル・ラル、ユ・ラユ、レル・ラレルの下接した形は、古代語においても現代語においても、受身・自発・可能などを表す形式として知られている。提出された論文は、この述語形式をめぐる意味と構文を対象とし、古代語ラル形述語を中心として時に通時的、汎時的な観点を動員しつつ、総合的、全体的に考察したものである。

本論文は、次の三つの課題を立て、それを有機的に結び付けることによって、独自の主張を形成するに至っている。

「課題Ⅰ」は、日本語の受身とは何かという本質規定である。日本語の受身は構文的には規定できないと論じ、意味の面から規定しようとするどこにどのような問題があるかということに関して、膨大な研究史を驚くほど丹念に且つ論理的に整序することを通して緻密に論じた上で、「日本語の受身文とは、〔ラレル形述語〕を持つ文のうち、〈被影響〉(＝有情の主語者が感じる被影響感)を表すもの」と規定している。

「課題Ⅱ」は、古代語和文に見られるラル形述語文の諸用法の整理と、各用法の意味・構文の両面にわたる精密な記述である。この中で川村氏は、従来認められている受身・自発・可能・尊敬の4用法を意味の面から厳密に再度規定しなおし、そのほかに2つの用法を新たに認定している。その上に立って、各用法についての名詞項の格表示形式を綿密に調査し、その結果、6用法を大きく3種に分類することに成功している。

「課題Ⅲ」は、ラル形述語文の多義の構造に関する説明である。課題Ⅱで整理した6用法の意味は互いに異なる次元にあり、この異質な意味をもたらす構造を求めることに加えて、用法ごと取る格体制の異同についても説明を与えなければならない。この難しい要請に応えうるものとして、先行学説の「出来文」説(ほぼ現代語についてのみ考えている)を古代語において検証し、「出来文」説は現代語のみならずむしろ古代語においてこそ一層有効であることを論証している。

課題のⅠ、Ⅱ、Ⅲにおける見解は、相互に緊密に支え合っており、論理に破綻がなく、全体として高度なまとまりを持った論文が完成している。独自の立論、主張を為すために新しい術語や従来の術語の新規定を採用しており、用語についてはもう少しクリアーであってもよいが、そのような用語法に拠ることによって論旨が明快になった面は十分に評価でき、論文の全体にわたって統一的な視点から説明することに成功している。理論的見解の構成の基になるべき古代語の事実に関しても、十分な調査の上に立って、個々の用例をよく吟味し、不明確な例を注意深く排除して明晰な論を立てている。

膨大な量の先行研究の完全な理解、捉え直しと周到な事実調査を踏まえて大きな理論的主張を為し得たことは高く評価でき、博士(文学)の学位を与えるにふさわしいものと認められる。